

みなと元町

タウンニュース

No.
312

発行:みなと元町タウン協議会 住所:〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内 発行人:奈良山喬一 編集人:岩田照彦 電話・FAX:078-391-0831

『こうべのまちづくりの話』で得た金言

ゼンクリエイト 根津 昌彦

いつもの寄稿と今回は少し趣向を変えようと思う。「まちづくり」という言葉は、20年前に比べて、いろいろな場面で多くの人が口にする『一般名詞』になったことを、最近すごく感じる。自身も、社会人になりたての頃(25年前)は、自分の職業を「都市計画コンサルタント」「再開発コンサルタント」というように説明していたが、いつの頃からか何の抵抗もなく「まちづくりコンサルタント(略して、まちコン)」というようになった。

ところが、自分の職業名はすらっと言えても、仕事の中身を説明することは相変わらずスマートにできないという状況が続いている。「まちづくりとは？」という問いに対して、私たちのようにこの仕事にどっぷり従事している者も含めて、言葉少なく明快に説明できないところが、「まちづくり」の奥の深いところなのである。

6月30日(土)の午後に、こうべまちづくり会館の2階で、すまいネット主催で『こうべのまちづくりの話』というセミナーが開催された。「神戸市内で活躍する“まちづくりの専門家”の方々に、日々の活動を通じて感じる自身の役割や、神戸市のまちづくりについて喋っていただきます。“まちづくり”に興味のある方の参加をお待ちしています。」という触れ込みのセミナーに、私は、第2部の若手まちコンのパネルディスカッションのコーディネーターという立場で参加させていただいた。

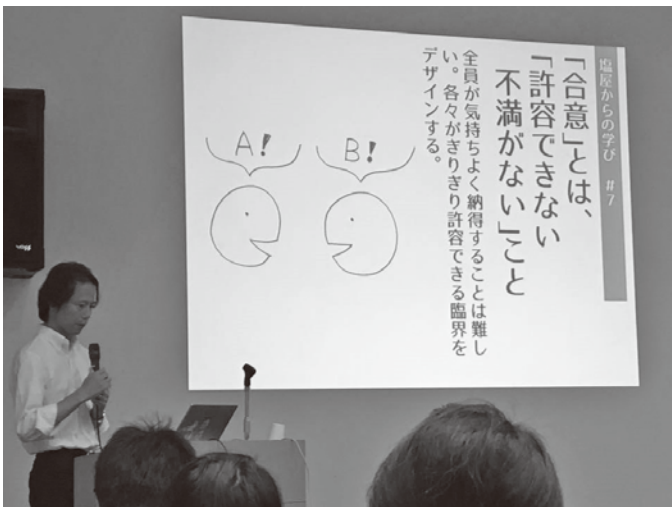
日々の活動を通じて感じる自身の役割を、私よりも10歳ほど若い世代の“まちコン”はどんな風に感じているのだろうか。何に心を配りながら、彼らは「まちづくり」に取り組んでいるのだろうかという、私も知りたいテーマ・内

容を、彼らの口から引き出す役割として、約80分間、4人の若手まちコンとあれこれ話をしたのである。まちづくりの現場に入っている彼らは、ほぼ1人で地域に乗り込み、主体的に地域の人々に関わりながら、悩みごと、お困りごと、有りたいまちの姿などを引き出し、自ら考え整理した課題解決の道筋を示して、地域内での合意形成に尽力していることがよくわたったのである。進行しながら、「やるなあ、4人とも……頼もしい!」との思いをもって、楽しく会を閉じたのであった。彼ら自身が、いろいろと悩みながら知恵を絞りだし、汗をかいていることもしっかりと伝わったし、参加して下さった大学生や若手の市職員の方々などには、いろいろと感じていただけたのではないかなと思っている。

私たちまちづくりコンサルタントが起用される場面は、今日非常に多岐にわたっている。商店街をはじめ、閑静な住宅街もあれば、震災で再整備された市街地、オールドニュータウン、農村地域など、派遣されるまちの形態が違うこともさることながら、最近はテーマが先に決まったまちづくりの取り組みなどにも、多くかかわっている。地域防災、福祉・ユニバーサルデザイン道路・公園づくり観光、地域商業活性化、歩いて暮らせる農業振興、環境保全景観整備、2つの老いを抱える団地の再生……、これだけたくさんの分野に精通している専門家って実際にいるのか、そ

もそも私がこれだけのテーマについて深い造詣があるのかという正直そんなことはない。しかし、私たちが求められるのはなぜかと考えると、それは第三者という立場で当事者の間に入り意見を取りまとめる、つまり「合意形成」という技術と経験に汎用性があり、そこを買ってくださって、さまざまなまちづくりの場面に起用されているのではないかなと思うのである。

そうか、合意形成を図りたいまちの人たちから、私たちにオファーがあり、私たちは合意形成のプロとして、さまざまなまちで仕事をさせていただいているのかと、今更ながら、6月30日のセミナーに参加して感じた次第である。そう感じるに至った決定的な金言に、実はこのセミナーの第1部で出会うことが出来た。最後にそれを紹介して、本稿をくくりたいと思う。『「合意」とは、「許容できない不満がないこと」——全員が気持ちよく納得することは難しい。各々がぎりぎり許容できる臨界をデザインする。』私たちの仕事、まちづくりとは、この言葉に集約されるのかもしれない。



「元町・夢街道」

書店の話(14)

吉岡宝文館(1)

岩田 照彦

鳩居堂について元町に登場する書店は、吉岡宝文館である。

兵庫県書籍雑誌商組合創立三十周年記念誌によると、吉岡家は安永五一七七(一)年に起こり、天明年間(一七八一〜一七八九)書舗をひらく。五代目の平助まで、すでに百二十年余の歴史がある関西の老書舗だった、という。関西というだけで地域を特定していないが、大阪宝文館の呼称で分かるように、大阪で発足した書舗である。

が、六代目をつぐ後継者がいなかった。明治十八(一八八五)年九月、五代目平助のあと家業をついだのは、岩井姓を名乗っていた者を吉岡家に迎え入れ、六代目当主平助を名乗らせた。吉岡家から他家へ養子縁組させていたのを、急きよ、本家に引き戻したのか、それとも吉岡家に近い縁者に目をつけ家業を託すことにしたのか、経緯はわからない。

その六代目平助が、神戸に支店をだしたことにについて同記念誌は「神戸市の発展急激にしてその将来性あるに鑑み、同市元町五丁目に支店を開設」とあるのだが、神戸支店開設の年に触れた記録がふたつある。

ひとつは神戸史学会が発行する「歴史と神戸」十七・一五号に、片山正代・村田佐紀子連名の記述で「大阪宝文館神戸支店は明治二十年頃、吉岡宝文軒神戸支店として開設された」というもの。また安井裕二郎の著作「識る力」によると、明治十八年「大阪の老舗出版元・出版問屋、吉岡寶文軒、(宝文館)が教科書も扱う書店「吉岡寶文軒」を開店」とあり、同氏の資料には、「店頭で尾崎紅葉、石橋思案、山田美妙らが結成した硯友社」の雑誌「我楽多文庫」創刊号を発売、とも添えられている。

三十周年記念誌に記された六代目平助は文久三(一八六三)年の生まれで、没年が明治四十(一九〇八)年とある。明治十八年、といえば、六代目平助としてのれんを継いだ年。前から計画されていたであろう神戸支店の開業が、たまたま二十二歳の六代目平助が着任した年にあたったのか。それとも、二年の家業経験を経て二十四歳になった六代目平助が、発展めざましい神戸への進出を決断したのか。

いずれにしても二十代のはじめ、店主の座に治まった六代目の平助は、日本文化の礎となる本の商いに、深い愛情と意欲をもっていた。支店長に北村幸次郎をすえ、元町五丁目に神戸支店を開設、書籍の取引分野をひろげてゆく。

神戸元町商店街 楽市楽座 情報 8月

◇元町1番街商店街振興組合 TEL331-7850

元町1番街水曜市 8月15日(水)10時〜19時

◇風月堂ホール(有料) TEL321-5555

もとまち寄席「愚雅亭」

8月10日(金)

桂 文三 笑福亭 鶴二 桂 雀々

笑福亭 仁智 桂 梅團治 笑福亭 松喬

前売券は7月11日より風月堂で発売

◇こうべまちづくり会館ギャラリー(無料) TEL361-4523

8月2日(木)〜8月7日(火)

こころのアート展(油彩・水彩・書道・造形)

8月9日(木)〜8月14日(火)

企画展

8月16日(木)〜8月21日(火)

「時空・港神戸 第2弾 高架編」(写真・絵画等)

8月23日(木)〜8月28日(火)

第19回 麓和会展(油彩)

8月30日(木)〜9月4日(火)

三滴会展(書道)

編集後記

混雑した車内でのリュックの処理について書いた翌日、「満員電車内でも快適なリュック」の新聞記事を見た。満員電車の車内では、網棚にリュックをあげるか、前に抱えるなど邪魔にならないようマナーを喚起しているA社が開発したリュックを網棚へあげるのは方法の一つではあるが、混雑のなか、置き忘れたまま下車したときのことを想像すると、体から離す気にはなれないだろう。混雑した車内では、リュックはまえがけ、が基本といつてよい。そのための工夫として、本体をより薄くし、前向きに抱えた際、開きやすいポケットも設けた。前掛け奨励タイプのリュック登場で、混雑緩和への意識高揚に期待したい。

栄町通クリーン作戦

栄町通まちづくり委員会は7月13日(金)10時から10時30分まで、栄町通を中心に、ゴミ拾いと不法ビラ撤去、自転車・バイクなどへの不法駐輪警告チラシ取り付け作業など、栄町通クリーン大作戦を実施した。参加者は、(元栄海三丁目協和会)奈良山喬一、(神戸市住宅都市局)坂田竜一・田中淳也、(広島銀行)吉田照子、(兵庫県信用組合)仲川雅夫・宮本善弘・松岡世和・竹村空朗、(パナソニックホームズ(株))宮崎哲弘・鈴木京子、(㈱神明)小波津晴香、(大一産業(株))安田剛、(三鈴マシナリー(株))水口裕美子、(㈱イーエスプランニング)有本雅美、(佐野運輸)志賀俊之・高寺宏聡、(走水神社)兒嶋英毅、(まちづくり会館)小椋辰海、(新光明飾(株))中川俊・西村友博・藤田直之・篠原博明・大森貴美子、(佐田野不動産(株))佐田野宏之、以上24名のみなさんでした。毎月第2金曜日午前10時、栄町通6丁目佐田野不動産前集合の上、実施しています。お気軽にご参加ください。



海という名の本屋が消えた (57)

平野義昌

鈴木商店 その1

神戸の総合商社・鈴木商店のことはウェブサイトに「鈴木商店記念館」が詳細且充実している。是非ご覧いただきたい。本稿では元町周辺との関係を取り上げる。18(大正7)年8月の《米騒動》から。

フランス文学者・小松清(1900～1962年)の家は兵庫の米穀商で《米騒動》被害者。その時、父も男性従業員も不在、女性たちと小松少年が留守番だった。

〈……夕方ごろだった。とつぜん、ワーッ、ワッという声が家の方へ押し寄せてきたかと思うと、つづいてバリ、バリと一せいに板べいかわされる音がした。(中略)店に目をやると、閉してあった店の戸はすでに一枚残らず滅茶苦茶にされ、並べてあった米桶はスッカリ空っぽになっていた。しかも、外はまだ群衆が一杯で、もっと米を出せ! 米を出さなければ焼打ちを喰わせろ! と口々に叫んでいた。〉^{註1}

群衆は石を投げ、米を強奪していった。帰宅した父が、あちこちの米屋が襲われていると言う。小松少年は支店に向かい、店頭に米俵を少しだけ残して、あとは隠した。被害を最小限に食い止めた。小松少年は群衆に向かって「もっと大物から奪え」と叫んだ。後に暴徒が鈴木商店に集中したことを知る。家業はこの時の損害で傾いていく。父は騒動を「社会主義者の仕業」と思い込んだ。

米屋の少年の一言で暴徒が行動を決定したわけではないだろう。被害に遭った米屋や焼打ちされた《鈴木商店》はどんな悪事をしていたのか。それに何故小松の父は「社会主義者」と思ったのか。

明治末からの日本社会はどんな状態だったか。大国ロシアとの戦争に勝利したものの、賠償金を取れなかった。一般庶民は戦争に動員され増税に耐えたが故に、不満は大きく、1905(明治38)年9月、講和条約反対集会から暴動事件になる(日比谷焼き討ち事件)。また、商店主、中小企業主らは地代や電気料金値上げ反対運動を起こす。都市のサラリーマン・労働者たちは政治参加意識が高まる。民衆の社会運動が「大正デモクラシー」を担っていく。

政権は、薩摩・長州閥の元老支配による桂太郎と立憲政友会の西園寺公望が交代で勤めていた。12(大正元)年12月、第三次桂内閣に対して立憲政友会、国民党、新聞社が全国で反閥族政治・護憲運動を展開。13(大正2)年2月、薩摩閥と立憲政友会連合の山本権兵衛(海軍大将)内閣成立。しかし、海軍高官贈収賄事件(シーメンス事件)で全国の新聞社が内閣打倒運動。14(大正3)年3月、山本内閣退陣、国民に人気があった大隈重信が復帰するが、これも閣僚の汚職事件などで支持を失う。16(大正5)年10月、長州閥の寺内正毅(陸軍大将)内閣登場。ロシア革命が起きると、寺内はシベリア出兵を発表する。

〈大正デモクラシーを背負って立っていたそのころの多くの新聞記者は、ロシアの一〇月革命を好意的に注視し、日本のデモクラシーが各層に浸透して行くことを期待していた。とくに欧州大戦によって国際的にもつながりをもったデモクラシーは、一

層あらゆる層にその思潮が広がって行ったが、大正七年(1918)七月一日、寺内内閣はアメリカとともに革命途上のシベリアに共同出兵する方針を明らかにした。全国の新聞はこぞつてこのシベリア出兵の理由があいまいで、ロシアの革命を押さえるとする軍国主義の政策であると非難し、反対の論調を掲げた。／寺内内閣は、これにたいし反政府、シベリア出兵反対の新聞を発禁処分にし、自由な言論を抑圧する態度をとり「新聞は扇動する」という考え方に支配されていた。〉^{註2}

寺内と新聞社の対立は決定的で、特に「大阪朝日新聞」は非立憲的と徹底批判していた。その内閣の重鎮・後藤新平(内務大臣・外務大臣)と鈴木商店・金子直吉は台湾利権で深くつながっていた。

経済状況は第一次世界大戦による好景気から物価高。物価指数は大正3年を100とすると大正7年は230になった。^{註2}

米価値上がりは庶民を直撃。悪天候とシベリア出兵による政府の買い上げを見込んだ買い占めで価格は暴騰する。

同年7月23日、庶民の実力行動が始まる。富山県魚津の漁師の女房たちが米の県外積み出しを阻止。《米騒動》が各地に飛び火する。

神戸では、戦争景気で労働者人口が増加し住宅難。家賃も値上がりしていた。借家の7割を兵神館という業者が管理し、厳しい取り立てをしていた。

8月10日、大開通の普請場の板囲いにビラが貼り出された。

〈生か死か、市民の飢え迫る、米価の大暴騰、この米価騰貴に無能なる県当局の措置、市民よ起って奮え、同志の列士は十日午後七時を期して、湊川遊園地に集合せよ、しかして米価対策の市民大会を開こう! 〉^{註3}

当日市民大会は開かれなかったが、11日の新聞でビラの内容が掲載されると、人々が湊川遊園地に集まった。あちこちで演説が始まり、米屋に談判しようと言う。千人近い人が遊園地から新開地に出た。有馬道、多聞通、橋通と米屋を襲い、湊川に戻り解散した。

12日、ついに鈴木商店がターゲットになる。湊川で反政府活動家たちがアジ演説、内閣批判、鈴木攻撃。集まった人は2万人とも言われている。群衆は3隊に別れ、1隊が鈴木商店に向った。〈……「場所がよかった。焼打ちされるに便利なところにあったからな」と言っていたが、そこから襲撃されるにしていは、鈴木商店は恰好の距離にあった。距離にして一キロ半。道はよく、坂道を下り切り一息つくところに、ちょうどその建物がある。(後略)〉^{註4}

後年、直木賞作家・城山三郎(1927～2007年)が取材した当時焼打ち現場にいた人の証言である。

鈴木商店本社は東川崎町1丁目(現在は栄町通7丁目)、湊川遊園地から新開地～湊川神社～元町商店街西入口の手前からすぐ南、元はホテルだった建物。大きな通りだが、群衆によって市電は止まる。鈴木商店に火がかけられ、道路を挟んだ東側の神戸新聞社も放火された。

13日、栄町3丁目の外米輸入商・湯浅商店に群衆が集まる。軍隊と衝突、群衆側に4人の死者が出た。14日以後、群衆はさらに暴徒化し、市内各所で米屋を襲撃し略奪した。

神戸新聞は、12日の暴動を「獐猛なる秩序的暴行」「遠謀熟慮」と推測する記事を掲載。「衆怨の府鈴木商店の所在地であっただけ、斯く断定し得る理由がある」と書く。現段階で真因を説明できないが、社会主義者による煽動、民衆の怨みという原動力、蜚語による付和雷同、と分析している。^{註2}

城山は鈴木＝悪者説に疑問を持ち、事件を追う。1960年代まで、米騒動＝鈴木商店＝焼打ちで、鈴木商店は米を買い占めた悪役と決めつけられた。歴史学専門雑誌『新史流』創刊号(法政大学社会学部歴史学研究会、1954年)の論文「神戸に於ける米騒動」がわずかの聞き取りで断定していた。米騒動資料を集めた研究書『米騒動の研究』(全5巻、京都大学文学研究所、有斐閣、1959～62年)も『新史流』を引用している。^{註4}

城山の取材では、鈴木商店勤務経験者や家族たちは会社を誇り、経営者の人徳を語る。世間のイメージと違いすぎる。前述の論文が依拠した証言者たち(米屋、米取引所勤務者、同和事業関係者)に直接訊ねて回るが、彼らは新聞報道や噂を口にするだけだった。

「新聞にしきりに書いてましたからな」「あくどいことをするやつはやっつけろ、ということになったんじゃない」

「あのとき、米の買占めに鈴木が金を出しとった。そのわかってた人がいるんやなア」「われわれにはわからんけど……。金子直吉から相当の資金が出てたんだろという噂や」「急に成功したんだから、えげつないこともしたんでっしやる」^{註4}

信憑性が疑われるにもかかわらず、論文執筆者は断定し、検証していない。城山には大きな異和感がふくらむ。

〈……あの異和感は、わたしにとっては、歴史から突きつけられた挑戦状だ。傲慢な挑戦状。〉^{註4}

- 註1 青木重雄『青春と冒険』中外書房 1959年
註2 『神戸新聞社七十年史』神戸新聞社 1968年
註3 落合重信・有井基『神戸史話 近代化うら話』創元社 1967年
註4 城山三郎『鼠 鈴木商店焼打ち事件』文春文庫 1975年



鈴木本社跡地の碑

出来事ファイル (No.18-8)

■神戸もとまち古本市

6月21日(木)～24日(日)まで、神戸まちづくり会館で「神戸もとまち古本市」が1階フロアで開かれた。出店したのは、おくだ書店、カラト書店、口笛文庫、サンコウ書店、清泉堂倉知書店、トンカ書店の6店舗。神戸市住宅都市局まち再生推進課が、まちづくり会館の新しい活用に向けた社会実験としておこなったもので、掘り出し物をもとめる人たちにぎわった。



■元町の芸術家たち展 作品集発行

元町商店街で構成する専門部会の「元町の芸術家たち展」は、1994年～2017年迄開催した15回にわたる出展作品集を5月20日付で出版(非売品)した。元町生誕120年でスタートした同展覧会は、まちづくり会館を会場に実施、毎回、5月の連休時期に開催、50名近い元町商店街ゆかりの作家たちが発表してきた。絵画、書、焼物、人形など、多彩な作品群をまとめている。



幽幻道士(キョンシーズ)



恋人たちの食卓

■ビニール傘住人 転居

今年の2月、地域のクリーン作戦を実施しているグループから、きらら広場にビニール傘を組み合わせたハウスに住所不詳者が定住している、と報告を受けた。神戸市保健福祉局保護課に連絡、事情を説明のうえ、転出を依頼したところ係員が現地を確認、他の地域でも指導の実績がある69歳の男性と判明、地元の声を伝えてもらったところ、4月になりビニール傘ハウスは姿を消した。



■グリーンロードの会 美術館を楽しむ

6月21日(木)、グリーンロードの会(代表・安原邦夫)は、6月の例会として午前10時阪神・元町駅に集合のうえ、神戸ファッション美術館を訪れた。大正ロマン・昭和モダンと題して、「武久夢二や高島華宵とその時代」の作品を集めた展覧会。武久夢二や岩田専太郎、中原淳一のほか地元から河西英も登場、参加者のみなさんは、いろいろな場所でさまざまな角度から描かれた女性像を楽しんでいた。



■D51ひろば 除草剤散布

ひろばの雑草を除去しようと、人手で除草作業を試みるが根が深く、抜き取るには容易でないことから協議会では、除草剤散布作業をNPO法人リ・フォーブに依頼、除草剤の散布作業が6月16日(土)行われた。先月、実施の予定日、現場を訪れたが草ひきが行われていたため延期していたもの。草挽きして頂いた方、弊事務局までご連絡ください。



□読者プレゼント

ミニチュアや映像トリックを用いた日本の「特殊撮影技術」は世界に誇るものでした。特殊撮影に登場してきたヒーローや怪獣、乗り物、兵器などの造形作品が身近にみられる展覧会が明石で公開されます。

観覧ご希望の方は、はかぎに住所・氏名・年齢・本紙へのひとことを添えて編集部まで。先着順で5名の方にペア招待券を送ります。

ゴジラ スーツ
『ゴジラ×メガガラス G消滅作戦』(2000)より
TM&©TOHO CO., LTD.

場所:明石市立文化博物館
電話 078-918-5400
期間:7月14日(土)～9月2日(日)

■「元町映画館八周年」×「南京町生誕百五十年」

元町通四丁目、商店街に開業した元町映画館が八周年にあたる今年、南京町は生誕百五十年を迎えた。年齢に大きな開きはあるものの、それぞれの長寿を祝って映像文化と食文化のコラボ企画が展開できないか。そんな夢を語り合っているうちに実現したのが文字通りのタイトル企画。元町映画館では、特別企画として映画会社に交渉、小さい劇場では放映できない名作を上映できることに交渉、実現した。八月十八日から一週間にわたって元町映画館で上映する作品は、台湾の巨匠アン・リー監督による父親三部作のひとつ『恋人たちの食卓』で百種類以上の料理で画面を彩る作品のほか、中華料理店の娘、チャンの助っ人によつてきた香港人ト・ロン役をブルース・リー監督・主演でおくる『ドラゴンへの道』、大道芸人として放浪をつづける親方と四人の男の孤児の前に立ち塞がるキョンシーたちを描いた『幽幻道士キョンシーズ』の三作品。上映日時などは、直接「元町映画館」(☎36612636)まで。



ドラゴンへの道